

STAGE 4

説明的文章（人文科学）

① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 日本語については、とかく、主語がはっきりしなくて曖昧だとか、述語が最後にくるので言いたいことが分からないとか、あれやこれやと議論が絶えない。だが、私は、日ごろからそれらを、¹ 的外れもはなはだしい擬似問題だと思っている。それどころか、そのように問題とされるところにこそ、日本語の最も論理的な部分があるとさえ考えているのである。唐突な質問ではあるけれど、手紙の宛名の書き方は、はたして日本流と西洋流とどちらがすぐれているだろうか。そう、私たちは「〇〇県」「〇〇市」「〇〇町」「〇丁目」「〇番地」という形で、¹ 大きなカテゴリーから次第に小さなものへと限定し、最後に個人の名前をもつてくるが、西洋ではこれが逆になるというあの書き方である。いかがだろう。私は、² まぎれもなく日本流が理にかなっていると感じるし、そのことは、実は、多くのフランスの友人たちも認めているところなのだ。

② 日本語の主語・述語と呼ばれるものの働きは、まさにこの宛名書きの形式に一致する。ために、主語をめぐる議論で有名になった「象は鼻が長い」の一文を考えてみよう。そもそも日本語に主語という概念がふさわしいかどうかを検討せずに、「象は」が主語か「鼻が」が主語か、など論じることがやめにして、今は、この表現の論理展開だけに注目していただきたい。まずこの表現は、「象は」と言つて、語るべき主題を提示し、さらにこの主題のなかで「鼻」を限定することによって、順次、その内実を語っていく。つまり、日本語の論理プロセスも、基本は宛名書きと同じく、大きなカテゴリーから次第に小さなものへと絞りこんでいくスタイルなのである。

③ こうした日本語の発想はすぐれて「探索的」かつ「発見的」なものとなる。なぜならそれは、私たちの内部で初めは漠然としていたものが、次第に明らかになっていくプロセスを正確にたどっているからだ。当初は何もないところで、にわかに一つの意味が姿をとり始める。それを私たちは「は」という表現により、かなり、² 大ざっぱな一領域として設定する。そしてこの領

域がひとたび決まれば、今度はそこに「は」という表現があらわれてその領域をさらに細かく限定する。この限定されたものは、さらに次の表現によって限定され、それはまた……と続いて以下同文。最後には、見事に³ 彫琢された結論が得られるというわけである。

④ とりわけ、このプロセスにおける最初の「は」という表現などは、日本語の特徴をきわだたせるものであるとともに、単なる言語学的な視点をこえたところで、豊かな思想的意味を³ かいま見せてくれもする。通常、学校文法では「は」「が」「も」などの格助詞をしたがえるものを「主語」といつてはばからない。しかしながら、「佐藤はもうとくに来ているけれど、鈴木はまだ見ていないなあ」というような場合、⁴ 「鈴木は」の部分の主語と呼ぶわけにもいかないだろう。そこで国語学者たちは、「は」という表現に「⁵ 提示」といった定義を与えて、決着をつけたように思いこむ。そして思いこんで安心し、「は」のもつ⁵ 認識論的な重要性をすっかり見のがしてしまふのである。

⑤ あたりまえのことながら、私たちはつねに世界のなかで生き、そこであれやこれやの関心をもちながら、世界とさまざまな関係をとり結んでいる。私たちが、べつにこれといった注意もはらわなければ、世界は、³ ぼんやりとしたまどろみのなかにあるのだが、ひとたびそのどこかに注意を向けるならば、とたんに世界も、それに応じた表情を見せるようになってくる。したがって、世界と私たちは表裏の関係にあると言っていいたいだろう。

⑥ こうした世界のただなかにあって、私たちの前には、いつも一つの「知覚野」と呼ばれる意識の領野が広がっているのだが、ここに、ある時ふいに、⁴ 曖昧模糊としたうながしのようなものが生じてくる。このうながしは、少しずつ意識化のプロセスをたどり、それが次第に形をとって、ついには命名というレベルにまで達することになる。そこで私たちは、「は」という言いまわしによって、言語表現への決定的な第一歩を踏み出すことになるわけだ。つまり、やや大げさな物言いを許していただければ、「は」には、

西洋語の主語にはない「知覚」から「言語」への移行が表現されている。まさしくこれこそが、西洋語には見られない「は」のもつ認識論的な重要性なのである。

7 この決定的な一歩が踏み出されてしまえば、その後は、すでに述べたように、言語上での細かい限定作業が続けられるばかりとなる。思考するとは、結局、思考する領域を次第に画定し、いっそう明確化していくことにはかならない。このような明確化の歩みは、広範な領野から次第に絞りこまれていく以上、いながらにして「帰納的」であるはずだ。さらにまた、それが一個人の言葉によってなされるものであれ、対話者の言葉を含むものであれ、いずれにしても共通の領野のなかで下位区分しようとするのだから、重ねられる言葉は「協調的」なものになるであろう。

8 これに対して西洋語の論理はどうなるか。「AはBである。なぜなら、……であり、……であり、……であるからだ」——こうした論理は、かならずや「既定的」「演繹的」「対立的」とならざるを得ない。それはすでに「AはBである」と言ったところで勝負がついているのであり、結論は、それが正しいか誤っているか、二つに一つしかないのである。つまり、このような西洋語の論理は、あらかじめ論者のなかで決着のついたことがらを戦わせるには好都合だが、日本語のように、探索し、帰納し、協調して、不確かなものから徐々に結論を創造してゆく論理にはなりにくい。

9 その意味では、日本語の論理の方が、実は、はるかに「発見的」であり「創造的」なのだ、いかにせん、国際会議あたりで論争するうえでは分が悪。さらにまた、日本語の論理は、私たちが「探索的」であればこそ、その全き論理性を発揮するものであるにもかかわらず、わが同胞には、不確かなものを不確かなまま放置して、いっこうに動じないふうもある。そのうえ、こうした風潮は、今や情報化社会の便利ツールの手をかりて、わが国に蔓延し始めており、日本語の論理など語るはおろか、あらゆる論理が破綻してゆく様相さえ呈しているのである。これは言語の問題ではありながら、言語の領域をはるかに越えた射程にまで拡がっている。

(注) 彫琢＝文章などを最適な表現を求めて考え練り上げて、立派なものにする。
(加賀野井秀一「日本語は進化する」から。)

ること。

画定＝区切りをはっきりと定めること。

帰納＝ひとつひとつの具体的な事実を総合し、それから一般的な原理または法則を導き出すこと。

演繹的＝一般的な原理から特殊な原理や事実を推論すること。

全き＝完全な。

蔓延＝(よくないものの)勢いが盛んになってあちこちに広がること。

破綻＝成り立たなくなること。

(ア) 線1「的外れもはなはだしい擬似問題だと思っている。」とあるが、筆者はなぜそのように思っているのか。その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 世界には国や地域の歴史、習慣に由来するさまざまな言語が存在し、そこに生きる人々の生活に密着している以上、ひとつの言語を取り上げて批判することは、その言語を使用している人間を批判することになるから。

2 筆者は日本人であり、生まれてからずっと日本語を使って生活をしているため、日本語に対する愛着は人一倍強いものがあり、その日本語の構造を否定的にとらえる議論に対して日頃から腹立たしく思っていたから。

3 そもそも日本語という言語は、主語がはっきりしないという点に大きな特徴があり、相手に自分の意志を直接的ではなく、遠まわしに伝えようとするところに、日本人の相手を思いやる国民性が凝縮されているから。

4 大きな漠然とした領域から、次第に小さなものへと絞り込んでいく日本語の論理の過程は、西洋語の論理に比べ、不確かなものから徐々に結論を創造していくという点ですぐれており、探索的、発見的であるから。

(イ) 線2「まぎれもなく日本流が理にかなっている」とあるが、これに対し、西洋語の論理が日本語の論理に比べ、理にかなっていないことを述べているのはどの段落か。本文中の□⑨段落から一つ選び、その段落番号を書きなさい。

